



北緯 29 度以上を A、北緯 29 度未満を B とする。A・B とともに縦と横が 10 区分される。ひとつひとつの区分（メッシュ）には、国土地理院の 5 万分の 1 地形図が、縦 10 枚、横 10 枚の合計 100 枚が入る。これを「100 区画」と呼ぶことにする。そして、A・B とともに各 100 区画のメッシュに対し、左上から順に 00、01、02、…99 と番号を与える。これを最初の 2 桁とする。

左図の全体枠がひとつの 100 区画である。100 区画の中に縦横 10 枚ずつ並んでいるひとつひとつのメッシュが 5 万分の 1 地形図に該当する。これらのメッシュにも左上から順に 00、01、02、…99 と番号を与える。これを 100 区画の番号の後ろに付加することで、6500、6501、6502、…6599 のように 4 桁の数字で 5 万分の 1 地形図が指定できる。

さらに 5 万分の 1 地形図を縦横に 10 分割することで、100 個のメッシュに切り分け、各メッシュに左上から順に 00、01、02、…99 と番号を与える。これを上記の 4 桁数字の末尾に付加することで、例えば、653300 のように調査地点が含まれているメッシュを 6 桁の数字でコード化する。このことで、対象地点を指定する。

LAJ と GAJ では、この 6 桁の数字で地点を指定している（6533.00 のように末尾の 2 桁の前にピリオドを入れることもある）。これが調査地点番号システムである。これをより狭い地域を対象とする詳細な言語地図に応用すると、6 桁の数字を与えた枠をさらに 100 分割し、8 桁の数字で地点を指定するといったことも可能になる。

なお、冒頭の A と B の枠の 2 桁数字は、LAJ と GAJ が対象とした地点では、数字の重複が生じず、問題にならなかった。しかし、『新日本言語地図』(NLJ:調査プロジェクトは FPJD)のもとになった調査は、小笠原を対象としており、この場合、重複が生じる。そのこともあって、NLJ (FPJD) では、地点番号システムは採用せず、調査地点の経度と緯度の組み合わせにより、調査地点のコード化を行っている。